

**"THE FULBRIGHTER"**

**in**

**CHUBU**

**SPRING 1984**

**Chubu GARIOA/Fulbright Alumni Association**

—— 目 次 ——

◎ 巻 頭 言

=同窓会々誌発刊の辞に代えて

赤ゲット留学の思い出から、これからの留学研修雑感まで

57～58年度会長 高 仲 顕

◎ 例会特別スピーチより

“チンパンジーの知的行動”

会員・京都大学霊長類研究所教授

室 伏 靖 子

◎ 1983年度総会スピーチより

On “Orientation Course”

会 員 石 川 進

Brief outline of the speech by Professor D. A. Kolb

= 同窓会々誌発刊の辞に代えて =

赤ゲット留学の思い出から

これからの留学研修雑感まで

57～58年度会長 高 仲 顕

思い出おこすと、2年前フルブライト同窓生の集りがあると言うのでノコノコ出て行ったのが運のつき、先輩方をさしおき中部同窓会の会長というイバラの座につかされました。

今回やっと長坂先生におゆづり出来る事になり、『同窓会元年』を迎えたと言うことでしょうか。名簿につづいて会誌を出すことになり、発刊の辞は、お前書けと役員会でのご指示なのでつたないペンをとりました。

形式的な発刊の辞など全くつまりませんので、私の留学した51～52年のガリオア留学記をまずご披露しましょう。

どういうキッカケでこのプログラムを知ったか覚えていませんが、〇×式というカンとカケがうまく当れば語学力とは関係なくパスすると言う試験のおかげで、ある日横浜より朝鮮事変の軍用船の帰り便に乗船と相成りました。G Iと一緒に吃水線下の蚕棚ベットでの生活が始まり、ご婦人と元宮様だけキャビンで優雅(?)におすごでした。将来首相が出るかも知れぬ連中を兵隊扱いはけしからんと申入れしたところ、G Iの中から大統領が出るかも知れぬのに何事と言われてギャフンとなりました。

同じ船に沖縄からの同胞が Ryukuan として乗って居られ Japanese とは区別されていることに直面して敗戦の悲哀を再びかみしめたものです。当時は Occupied Japan ですから吉田茂サインのパスポートも今のものとは大分ちがいます。朝鮮で米中が戦っていた時ですから Chinese と言われて罵声をよくかけられたものです。サンフランシスコで吉田さんがトイレットペーパーのような巻き紙に書いたスピーチを行い(現地報道)、無事独立国となり、街の中で Congratulation と声をかけられたことは忘れ得ぬ感激でした。

そのあとのフルブライト留学生時代と違う事は、ヨーロッパからの refugee が教授の中にはかなり居て、今以上に英語が判りにくく、こちらの語学力の貧しさと相乗されて留学生変じて留眠生化したことです。それでも郷里でバンザイの声に送られて出征兵士よろしく留学された方は不眠不休(?)で勉学され、中には不幸にも自殺された方もありました。

なにぶん、国ではイモの葉のスープにスイトンで飢えをしのぎ、工場では上はハダカ、下はハダシといった生活をしていたのがアメリカでの生活となったのですから、その較差の大きいこと。熱い食事の後のアイスクリームや甘いデザートなどには、おいしいより舌とお腹が仲々ついて行けませんでした。それに日本食などにはありつけず、仲間で教会のキッチンをかり、なんとカレーライスを作って随喜の涙を流したとは、今の方々には想像つかぬところでしょう。アメリカ人から Sir と言われて、敗戦国民の意識が肌にしみついたわれわれは大いにマゴマゴしたことも忘れられません。

私は今は脚光を浴びている Industrial Engineering を勉強して来たのですが、それの日本訳など当時なく、帰ったら何と報告するやら仲間と船が横浜につくまで議論して「要領工学」と決めたのですが、今は I E の方が通りがよくなっています。当時の主任教授マンデル博士は毎年日本に来られ、私と一緒に日本やアジアで仕事をするようになっていますから、この留学生制度のメリットと言うのは、大きな広がりがあるように思います。

向うに居る中に、私のアメリカのお父さん、お母さんが出来ました、ダデイは昨年93才で亡くなり、今は同年のジュニアと兄弟のつき合いをしています。

話がちょっと飛びますが、昨年の夏、6週間ハワイ大学経営学部へ夏季留学してきました。これは同学部に付設した太平洋アジア経営研究所の特設コースで、1セメスターを夏季に圧縮してクレジットも与えるようにしたものです。大学職員や社会人が学位取得を目指すには実にユニークな制度である他、大学としても資本回転率をあげるにうまい方法だと思います。

私、個人にしてみると30年余を経て、再び大学院学生として生活をして、センチメンタリズムに浸ることが出来ました。75才になると学謝は無料になりますが、まだ大分間があるので Visiting Fellow にしてくれ学謝半額になりました。しかしテストだけ受けずに、後は全く学生と同じ学習をしました。Chung 所長が、無理だと言うのに3コースをとりましたが、6週間の中でやるのですから、毎晩12時前には眠れない仕

末となりました。ガリオア留学生時代と違って語学力とそれに学習内容の理解力は向上しているはずですが、体力とかバイタリティは劣っているので、学生時代を懐しむより、たゞ夢中の毎日で、今になって30年前と同じ生活をしてよかったなあと喜んでいる次第です。センチメンタル・ジャーニーには行けないので、その代りになったみたいです。

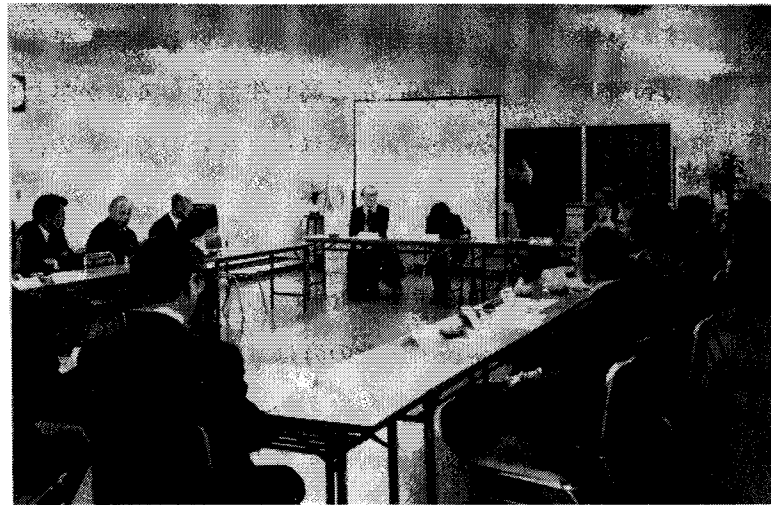
ところで、日本では目下教育改革の論議が盛んですが、仕組みよりは、教え方や学習の中味のあり方を変えることの方が重要でないでしょうか。アメリカも学部の方は大部問題あるように見受けましたが、大学院の方は、Education という語意に近いことをやっていることを再び認識させられました。教授と学生がラポルテしながら、本人のもっているすぐれたものを引き出す努力をすると言うことは、今の日本に欠けたところと思います。

ところで、アメリカは年間25万人とかの外国留学生を迎えているが、わが国は8千にながしとかで、他の国際化はともかく、全くお話しになりません。この同窓会の募金も進んでいますが、中部も九州や中国の如く支部同窓会独自の案も会議にのりましたが、金を集めても、お招きした人を受け入れる側の態勢が出来ていないので、すぐには無理と判り、名古屋もオリンピックどころの話ではなかったと、ガックリしています。

私の奉職する中産連では、年内延べ7,000人日の海外からの研修生をお迎えして、長期・短期の教育、訓練をしていますが、地元でのご協力がいつも限られた企業、機関に絞られています。また、私の所属ロータリーでも留学生やこちらから派遣する学生のお世話をしていますが、これも格別の努力をしないと乗ってゆきません。

われわれは、なにやかや言っても、個人としても、機関、社会さらに国として G/F 留学生制度のおかげを蒙っていると思います。彼等も恩返ししろなどいっていないと思いますが、受けた恩恵を返すなり、途上国の方々へ同じような形で差しあげるなりしなければ、「人の道」と言うものにも反する気がいたします。

会員の皆様が長坂新会長と役員のリダーシップの下で、このような線に沿ってご活躍賜わらんことをお願い申しあげる次第です。



チンパンジーの知的行動

京都大学霊長類研究所

教授 室 伏 靖 子

本稿は3月24日の例会席上行われたお話しの内容を要約したものです。なお当日はスライドを使用されましたので、文字だけによる“まとめ”は難しいですが、ご了承下さい。(文責記者)

野生のチンパンジーが野外で会うと挨拶として握手し、その場合弱いものが掌の平を上にし、強いものがその上から押さえるようにすることが観察されます。行動の研究はこのような観察に始まり、環境条件を実験的に変えて行動を分析することによって行なわれております。本日は、そのような実験においてチンパンジーがどんな知的行動を示すか、具体的にお話し致したいと思います。

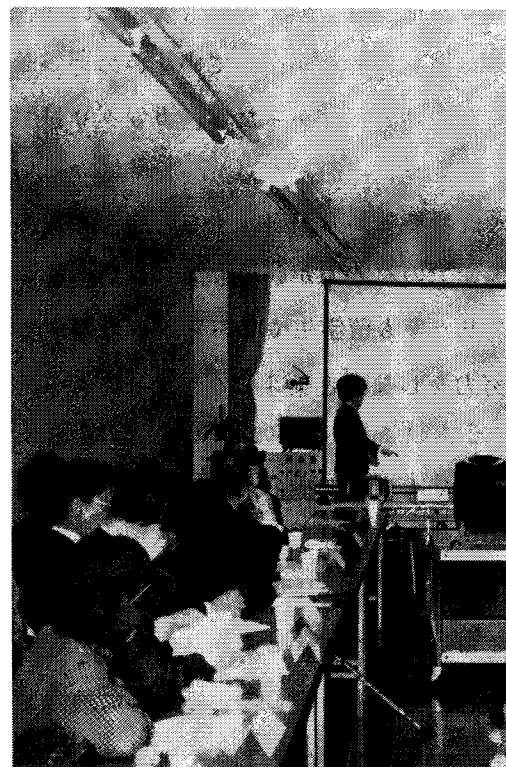
チンパンジーは人と同じ霊長目から出て、1,000万年前位に分離して今日に到っていると思われます。ヒトも当初は森林周辺に住んで昼は地上、夜は樹の上に住み、植物や果実を主体に小型哺乳類動物を補助的に食していたようです。四足で歩き時々直立し、発情は周期的で、簡単な武器と道具を用い、現在のチンパンジーに近い生活様式でありました。

500万年前頃から、地上を2足で歩き、骨盤が縮少し、未熟な状態で生れるために子育ての負担が増し、永続的な配偶関係が生れ、言語や家族の萌芽が見られます。

ところで乳歯、大臼歯、永久歯等の発生に要する年月を人間とで較べると、チンパンジーのライフサイクルは人の約1/2と言えます。

環境刺激に対する感覚の面では、聴覚、色覚などはほとんど人と同じであることが判っています。

知的行動としては、野外の観察では、蟻塚に棒をつっ込むことや、果実を石で割って食べるなど道具を使うというだけでなく、使いやすくするための工夫が見られます。



1984年3月24日(土)

会員例会

会員 室伏靖子教授による  
スピーチ

中産連ビルにて



2. This writer had the honor and the pleasure to join the 1951 Program. We were assembled by telegrams, at the Ministry of Education, Tokyo. It was around the Fourth of July.

1) After a proper ceremony, the 471 students were divided into twenty (20) 'Groups'. These Groups were called Orientation Groups. One Group held about 24 students. In each Group, a leader was elected. These leaders were to be very busy men and women until early September when the Course ended. Each Group was later to proceed to one of twenty (20) Orientation Centers set up in twenty (20) Colleges in the United States. This writer belonged to a Group going to a Bucknell University. The name 'Bucknell' was new to him, and didn't make any sense at all until.....

2) The Orientation started soon after the ceremony. Movies, Discussion Time, etc. From here all of our talks, public or private, were conducted in English language.

3) After we attended the Orientation at the Ministry of Education for a couple of days, we moved to Tokyo University (Ex-Tokyo Imperial University). The 'Course' went for about a week. Lectures on College Education Systems were among the highlights.

3. On around the 12th of July, we left Yokohama. On board the ship we found we had fifty (50) students from Ryukyu Area. The boat trip took about 12 days.

1) Every day the Course went on until noon. Movies, lectures, small talks by American Passengers, discussions, etc.

2) The ship, by bad luck, followed a baby typhoon. The sea was indeed high. But the attendance was surprisingly good.

4. Our ship, by direct route, reached San Francisco. We stayed for three days, at Mills College across the San Francisco Bay from the city of San Francisco. Then a three-days-trip to Chicago aboard a special train. The Southern Pacific Railroad brought out twelve (12) car-train with a dining car and a parlor (club, lounge) car, completing it with an observation car.

1) Bucknell University to where this writer's Group was heading stood right in the middle of the Appalachian Mountains near the Susquehanna River.

2) Here some eighty (80) students from some 24 nations took the course.

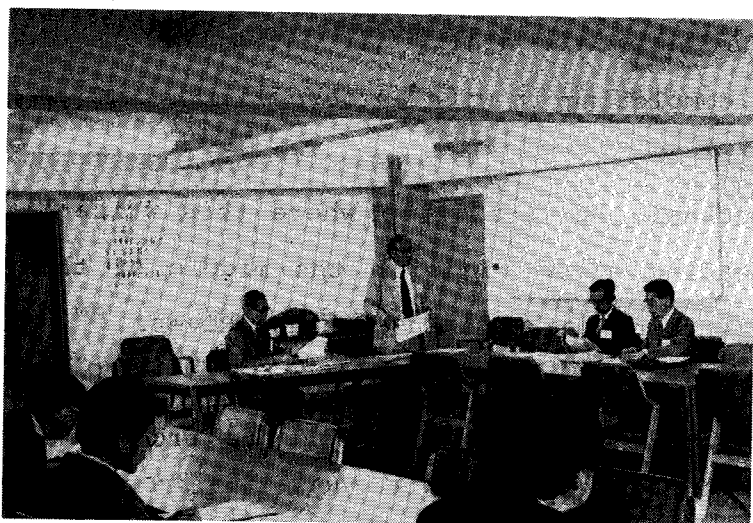
3) They had lectures in the morning. Geography, History, Arts, Government System of the United States, English Composition, Pronunciation and so on. In the afternoon, they had trips to farms factories, and outing to woods and lakes.

These six weeks of Orientation charmed students. After the Japanese students returned home, they kept exchanging letters among them. Once a while, they get together and talk of the Campus of Bucknell and fellow 'Foreign' students.

1983年5月24日(火)

58年度 会員総会

南山大学に於いて



### Brief outline of the speech by Professor D. A. Kolb

Brief outline of the speech delivered by Professor D.A.Kolb on 24 May, 1983 at the annual General Assembly Meeting for fiscal year 1983 - 84.

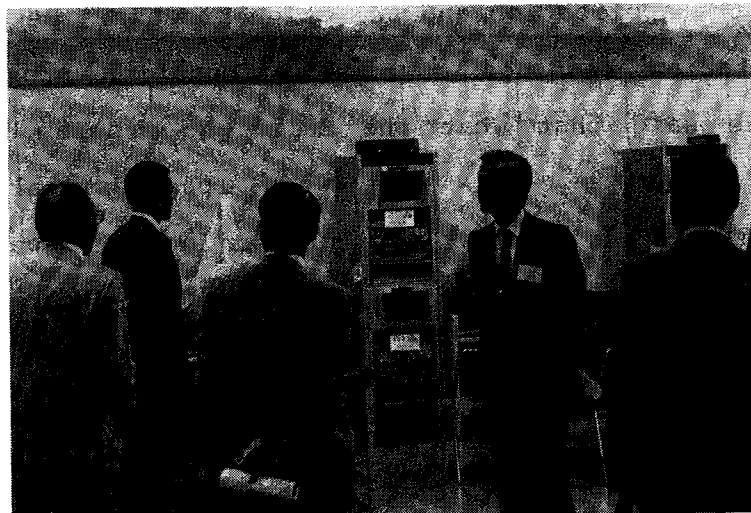
Professor Kolb first introduced himself and summarized his background and present teaching and research interests. He spoke of how happy he was to be in Nagoya. Then he offered some remarks about the Fulbright program as seen from the other side, from America. He spoke of his first encounter with the red pamphlet that "offered the world" in its listing of the various possible lecturer positions. He described the application and selection process. He praised the orientation readings and the orientation process in Tokyo. He said that what the Fulbright program offered American academics who were not professional area specialists was just that, orientation. This was both orientation, a touch of the Orient on their minds, and orientation, pointing Americans towards the rest of the world, so that they could perceive the differences under the superficial similarities, and the similarities under many superficial differences. Americans tend to be self-confident, a little innocent, and a little ignorant, he said, when dealing with other nations. This is true of

American academics too, if they are locked in their specializations. The Fulbright lecturer program gives a chance to experience and understand, to be understood, and this must effect a professor's future teaching perhaps his research, and surely his contact with students and with other faculty, which will have more of an orientation toward the world, more of an understanding of how we can talk to one another without losing our differences or our mutual respect.

1983年5月24日(火)

58年度 会員総会

南山大学に於いて



編輯発行

ガリオア・フルブライト中部同窓会  
事務局

〒461 名古屋市東区白壁三丁目12-13  
(社) 中部産業連盟国際事業部内  
TEL (052)931-3181(代表)